

政治学科

2012

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
101	政治学演習 (縣公一郎)	通年	3年以上：4単位	縣 公一郎 政政・経演・国演

副 題
Subtitle

公共政策研究

授業概要
Course Description

今日の社会生活で、政府活動の影響はあらゆる分野に及んでおり、私たちは政府活動との関連なくして一刻も生活を営めない、と言って過言でないだろう。従って、社会的諸関係構築のための戦略、計画、プログラム、個々の意思決定、具体的活動としての公共政策を通じて、政府が、なぜ如何なる行為を如何にして社会にもたらしているのかという点は、現代社会において問うべき重要な課題だろう。

本演習は、かかる政府活動の分析で基礎となる手法の学修と、その応用を目指すものである。

3年次春学期は、公共政策関連の内外文献を用いた報告や他大学との合同ゼミに向けた共同研究で基礎学修を進めつつ、各人の個別テーマ確定に努める。

3年次秋学期以降は、設定された個別テーマに関する研究と報告を経て、最終的にゼミナール論文を作成する。各人が研究対象とする国ないし地域（例えば、首都圏、日本、ドイツ、EU等）と、採り上げる政策領域（例えば、マルチメディア、通商産業、学術教育、国土、医療、農業、環境、交通、都市、労働等）もしくは政府・行政機構を、ある程度明確に設定しておいて頂きたい。その際、国際的枠組（例えば、ドイツのテレコム政策ならEU、日本の通商産業政策ならWTOや対米関係）を十分に意識してほしい。原則として3年と4年は別々の会合を持つが、相互に交流を図るため、火曜日 限と 限をゼミナールの共通時間として確保して頂きたい。

授業の
到達目標
Objectives

各人のゼミナール論文完成。

授業計画
Course Schedule

第1回：ガイダンス
第2回 - 第28回：学生による報告・討論
第29回 - 第30回：ゼミ論総括報告

教科書
Textbook(s)

参考文献
Reference Book(s)

評価方法
Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	%	
平常点評価 Class Participation	40 %	共同研究への貢献と日常的発言。
その他 Other	60 %	ゼミナール論文。

備考
Note

関連URL
URLs for References

<http://www.pprs-waseda.com/>

政治学科

2012

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
102	政治学演習 (飯島昇藏)	通年	3年以上：4単位	飯島 昇藏 政政・経演・国演

副題
Subtitle

リベラリズムとは何か？

授業概要
Course Description

リベラリズム（自由主義）は、その他の政治的語彙、なかんずく、さまざまな ism のなかでも、最も論争的な概念の一つであるといえる。リベラリズムをめぐる、たとえば、次のような問題群がたちあられる。リベラリズムとは何かを理解するためにはどうするのが最も良いのだろうか。リベラリズムはそれ自身で最も良く理解できるのだろうか。それとも、それは、その他の主義、たとえば民主主義や社会主義やファシズムなどとの比較のなかでも最も良く理解されるのだろうか。リベラリズムは近代や現代の独占物であるか。それとも、リベラリズムは古代や中世にも存在したのであるか。存在したと言えるのであれば、それらはどのような実体をもち、どのようなあられ方をしたのであるか。あるいは、近代的リベラリズムの創始者とはだれであるか。

この演習では、リベラリズムとは何かという問いに、レオ・シュトラウスの『リベラリズム 古代と近代』の講読を通じて、接近する。リベラル・デモクラシーの友を自認したシュトラウス自身は政治的な保守主義者であったが、かれの古典研究を通して、リベラリズムに阿らない、リベラリズム理解が得られるかもしれない。

授業の
到達目標
Objectives

古典の可能な限り正確な読解を通して、主題について単に知識を獲得するだけでなく、主題について論理的な議論をすることによって、さらに問題の深い理解に到達することを目指す。

授業計画
Course Schedule

第1回：『リベラリズム 古代と近代』の「序文」
 第2回：第1章“ What Is Liberal Education ”の講読と討論
 第3回：第2章“ Liberalism and Responsibility ”の講読と討論
 第4回：第3章“ The Liberalism of the Classical Political Philosophy ”の講読と討論（1）
 第5回：第3章“ The Liberalism of the Classical Political Philosophy ”の講読と討論（2）
 第6回：第4章「『ミノス』について」の講読と討論
 第7回：第5章「ルクレティウスについての覚え書き」の講読と討論（1）
 第8回：第5章「ルクレティウスについての覚え書き」の講読と討論（2）
 第9回：第5章「ルクレティウスについての覚え書き」の講読と討論（3）
 第10回：第5章「ルクレティウスについての覚え書き」の講読と討論（4）
 第11回：第6章「いかにして『迷える者の手引き』の研究をはじめるか」の講読と討論（1）
 第12回：第6章「いかにして『迷える者の手引き』の研究をはじめるか」の講読と討論（2）
 第13回：第7章「パドゥアのマルシリウス」の講読と討論
 第14回：第8章「エピローグ」の講読と討論
 第15回：第9章「『スピノザの宗教批判』への序言」の講読と討論（1）
 第16回：第9章「『スピノザの宗教批判』への序言」の講読と討論（2）
 第17回：第10章「善き社会に関する諸々のパースペクティヴ」の講読と討論
 第18回 - 第30回
 第18回から第30回までは、演習参加者各人の研究報告と議論を予定している。
 また、シュトラウスのその他の著作『ホップズの政治学』や『僭主政治について』などの講読も考慮している。
 夏合宿（2泊3日）での集中演習も予定している。
 上記は、ゼミ生の興味関心などで、若干の変更（順序などの）がありうる。

教科書
Textbook(s)

石崎嘉彦・飯島昇藏ほか訳『リベラリズム 古代と近代』（ナカニシヤ出版、2006年）ほか

参考文献
Reference Book(s)

添谷育志・谷 喬夫・飯島昇藏訳、レオ・シュトラウス著『ホッブズの政治学』（みすず書房、1990年）
石崎嘉彦・飯島昇藏ほか訳、レオ・シュトラウス著『僭主政治について』（上）（下）（現代思潮新社、2006年、2007年）

評価方法
Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	20 %	ゼミでのプレゼンテーションを含む。
平常点評価 Class Participation	60 %	ゼミへの出席、討論への貢献度など。
その他 Other	20 %	合宿やゼミコンパへの参加など。

備考
Note

関連URL
URLs for References

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
103	政治学演習 (梅森直之)	秋学期 (週2回)	3年以上：4単位	梅森 直之 政政・経演・国演

副題
Subtitle

近代日本の政治思想

授業概要
Course Description

われわれが現在暮らしている日本は、いったいいかなる来歴をへて、現在あるようなかたちになったのか。そしてそこにはどのような特徴があり、どのような問題があるのか。本ゼミナールでは、グローバルな歴史との連動を意識しながら、現代の日本を理解するうえで重要な政治思想の系譜を概観する。明治維新、自由民権運動、日清・日露戦争、台湾と朝鮮の植民地化、第一次世界大戦、満州事変と日中戦争、太平洋戦争の開始と敗戦、高度経済成長と安保闘争、グローバリゼーションと格差社会、これらは、資本主義とナショナリズムの変動を示す指標であり、またある場合にはその原因ともなった事件であった。日本の知識人たちは、こうした事件とともに、次第に顕在化する、階級やジェンダー、都市と農村、植民地と本国のあいだの矛盾や対立を問題化しつつ、そうした矛盾や対立を解決する方策を模索してきた。本ゼミナールでは、そうした矛盾や対立が、人びとにどのように経験され、そしてそこからどのような思想が生み出されたかを、明治維新から現代にいたるまでの代表的な日本の知識人のテキストをともに読み、議論することで、検証してゆく。

授業の到達目標
Objectives

テキストの「読み方」の習得
自分の考えを効果的に伝える「書き方」の練習
生産的に「議論する」訓練

授業計画
Course Schedule

※ 専門演習の「授業計画」は、募集の時点でホームページ等で公開しますので、必ず記載してください。

- 第1回：イントロダクション：「歴史」とは何か。現在問われるべき「問題」は何か
第2回：オンリー・イエスタディ（1980年代）：バブル経済下の学生生活の変容
第3回：安保から高度成長へ（1960年代、70年代）1：反公害闘争と民衆史
第4回：安保から高度成長へ（1960年代、70年代）2：反植民地闘争と安保闘争
第5回：戦後民主主義とは何か（1950年代、60年代）1：近代主義と近代化論
第6回：戦後民主主義とは何か（1950年代、60年代）2：主体性と戦争責任
第7回：占領と改革（1940年代）1：民主化の時代
第8回：占領と改革（1940年代）2：世界史のなかの占領
第9回：戦争の理念・戦争の思想（1930年代、40年代）1：戦争の記憶
第10回：戦争の理念・戦争の思想（1930年代、40年代）2：近代の超克
第11回：満州国の理想と現実（1930年代）1：東亜共同体から大東亜共栄圏へ
第12回：満州国の理想と現実（1930年代）2：植民地なき帝国主義
第13回：中間考察
第14回：資本主義と不均等発展（1920年代）1：大正デモクラシーの光と影
第15回：資本主義と不均等発展（1920年代）2：モダンガールの光と影
第16回：資本主義と不均等発展（1920年代）3：革新主義の台頭
第17回：植民地支配の理想と現実1：台湾 植民地統治の始まり
第18回：植民地支配の理想と現実2：台湾 自治政府への希求とその意義
第19回：植民地支配の理想と現実1：朝鮮 皇民化政策の来歴
第20回：植民地支配の理想と現実2：朝鮮 独立運動の展開
第21回：「社会」と「個」の発見（1910年代）：天皇機関説と民本主義
第22回：初期社会主義とその時代（1900年代）1：日露戦争とその批判
第23回：初期社会主義とその時代（1900年代）2：社会問題の発生と初期社会主義
第24回：乱反射するオリエンタリズム1：和辻哲郎、近衛文麿、岡倉天心
第25回：乱反射するオリエンタリズム2：樽井藤吉、福沢諭吉、大井憲太郎
第26回：国家建設期の思想史的問題1：文明論
第27回：国家建設期の思想史的問題2：自由民権論
第28回：「近世」とは何か1：徳川儒学の可能性
第29回：「近世」とは何か2：近世のなかの近代
第30回：理解度の確認

教科書
Textbook(s)

別途指示する。

参考文献
Reference Book(s)

梅森直之編著『ベネディクト・アンダーソン グローバリゼーションを語る』（光文社、2007）
ハリー・ハルトゥーニアン『近代による超克』（岩波書店、2007）

評価方法
Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	50 %	
平常点評価 Class Participation	50 %	
その他 Other	%	

備考
Note

これまでの基礎知識は問いませんが、これからの学習に対する強い意欲と好奇心ならびに知的柔軟性と持久力が必要です。無断欠席3回以上で、評価の対象から外します。

関連URL
URLs for References

政治学科

2012

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
104	政治学演習 (大浜啓吉)	通年	3年以上：4単位	大浜 啓吉 政政・経演・国演

副題
Subtitle

公共政策と行政法

授業概要
Course Description

行政権は市民社会の機能不全を正すために公共政策を策定の形をとって市民社会へ介入し、政策を実施します。公共政策の多くは法律の形式をとりますが、予算、計画、政省令、行政規則、通達等の複数の法形式に分散して表現されます。しかし憲法の枠を越えた政策は違憲となり、裁判所によって破棄されます。この演習では、憲法と行政法の基礎知識を身につけながら現実の裁判例を素材に公共政策の問題を行政訴訟の角度から勉強していくことにします。留学のため2年間ゼミを休みましたが、再開します。

最初の数回を「市民社会と行政法」と題して基礎知識についてレクチャーし、その後、事例問題を素材に報告と議論をしたいと思えます。将来(卒業時)の各人の研究のテーマ選択はまったくの自由です。挑戦すべき課題の例としては、自治体行政(分権政策)、まちづくり・開発行政、環境政策、福祉行政、財政金融政策、教育政策、年金改革や特殊法人改革、警察行政など沢山あるでしょう。議論を通して自らを磨きたいと思う熱意ある人の参加を期待しています。

4年生のゼミ論については、折り折りに3年生にも報告を聞いてもらいます。もちろん議論には大いに参加してください。

授業の到達目標
Objectives

行政法の基礎を身につけること。
自分の興味あるテーマ(公共政策)につき、知識を深め、論文作成力を身につける。

授業計画
Course Schedule

- 第1回：市民社会と市民法(民法)の原理(1)
- 第2回：市民社会と市民法(民法)の原理(2)
- 第3回：市民社会への国家・行政の介入
- 第4回：産業廃棄物処理施設反対事件(No. 3)
- 第5回：報告、討論、コメント
- 第6回：アイヌの聖地ダム事件(No. 4)
- 第7回：報告、討論、コメント
- 第8回：生活保護打ち切り事件(No. 10)
- 第9回：報告、討論、コメント
- 第10回：児童扶養手当打ち切り事件(No. 11)
- 第11回：報告、討論、コメント
- 第12回：パチンコ店建設反対事件(No. 14)
- 第13回：報告、討論、コメント
- 第14回：再開発反対事件(No. 15)
- 第15回：報告、討論、コメント
- 第16回：廃棄物大量不法投棄事件(No. 16)
- 第17回：報告、討論、コメント
- 第18回：タクシー運賃値下げ事件(No. 17)
- 第19回：報告、討論、コメント
- 第20回：内申書開示事件(No. 18)
- 第21回：報告、討論、コメント
- 第22回：用地買収情報開示事件(No. 19)
- 第23回：報告、討論、コメント
- 第24回：談合監査事件(No. 19)
- 第25回：報告、討論、コメント
- 第26回：米軍基地土地収用事件(No. 21)
- 第27回：報告、討論、コメント
- 第28回：胃腸薬傷害事件(No. 6)
- 第29回：報告、討論、コメント
- 第30回：河川水害事件(No. 9)

教科書
Textbook(s)

市川正人・曾和俊文・池田直樹編「ケースメソッド公法（第2版）」（日本評論社）

参考文献
Reference Book(s)

大浜啓吉著『行政裁判法』（岩波書店・2010年）、同『行政法総論（新版）』（岩波書店・2006年）。その他、必要な文献等はその都度、言及します。

評価方法
Evaluation

	割合(%) Percent(%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	%	
平常点評価 Class Participation	90 %	出席を最重視する。
その他 Other	10 %	熱意・筋の通った議論などができるか。

備考
Note

試験の答案のレベルが近年とても低く、学生の文章力と教養の低下が著しいので、04年度から、毎年若干の「新書」を読ませ、レポートを書かせることにしています。新書は、教師が良書と考えるものを選択しています。レポートには評価（A・B・C）を付けて返却します。みるみる力がついてきているように思います。「その他」として評価の対象とする。

関連URL
URLs for References

<http://www.waseda.jp/sem-ohama01/top.html>（大浜ゼミナールホームページ）2年近く更新していません。僕には能力がないので、ホームページ担当者を早く決めたいと思っています。

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
105	政治学演習 (川岸令和)	通年	3年以上：4単位	川岸 令和 政政・経演・国演

副題
Subtitle

日本国憲法の現在

授業概要
Course Description

日本国憲法は、敗戦という現実がもたらした新しい時代の新秩序を構成すべく制定された。その新秩序は、基本的人権・国民主権・平和主義の実現という構想を基軸にして展開されることとなった。これらの概念は日本史上根本的に新規なものである。またこの憲法は初めて広く討議に付され制定された。そのときから日本国民は自らの政治運営による正統性の探求という終わりなき旅を始めたのであった。60年余を経た現在、その約束は果たされているであろうか。

本演習は、新しい時代の新しい政治の科学として誕生した日本国憲法に関する判例・学説の現在の到達点を把握すること、そしてそのさらなる発展の可能性を問うことを目的とする。方法としては、法解釈学とそれを支える政治・思想・歴史的アプローチとを行きつ戻りつしながら進めていく。日本国憲法の可能性を問うことは、我々の過去を顧み、未来を構想することである。我々は集団としてどのような人間でありたいと考えているのであろうか。

憲法を勉強しようとする際には、感性が豊かで、人間や社会問題に幅広く関心を抱いていることが重要である。現時点での憲法に関する知識は問わない。温かい心と冷静に議論しようとする姿勢をもつ諸君の参加を希望する。

授業の
到達目標
Objectives

日本国憲法をめぐる判例と学説の現在の到達点を理解し、さらなるリベラル・デモクラシーの深化を構想することを目標とする。具体的には、4年次に大学生生活の集大成となるゼミ論文をまとめることである。

授業計画
Course Schedule

第1回：開講に当たって
第2回：戸松『プレップ 憲法』第3版を読む
第3回：戸松『プレップ 憲法』第3版を読む
第4回：尊属殺重罰規定違憲判決を読む
第5回：尊属殺重罰規定違憲判決を読む
第6回：棟居ほか『基本的人権の事件簿』第4版を読む
第7回：棟居ほか『基本的人権の事件簿』第4版を読む
第8回：棟居ほか『基本的人権の事件簿』第4版を読む
第9回：棟居ほか『基本的人権の事件簿』第4版を読む
第10回：棟居ほか『基本的人権の事件簿』第4版を読む
第11回：古関『日本国憲法の誕生』を読む
第12回：古関『日本国憲法の誕生』を読む
第13回：古関『日本国憲法の誕生』を読む
第14回：古関『日本国憲法の誕生』を読む
第15回：前半の理解度の確認
第16回：夏合宿ディベート大会での問題の検討
第17回 - 第29回：受講生と相談の上決定したテキストを読む
第30回：まとめ 期末レポート講評

教科書
Textbook(s)

戸松秀典『プレップ 憲法』第3版（弘文堂、2007年）、棟居快行ほか『基本的人権の事件簿』第4版（有斐閣、2011年）、古関彰一『日本国憲法の誕生』（岩波現代文庫、2009年）、川岸ほか『憲法』新版（青林書院、2005年）、飯島・川岸編『憲法と政治思想の対話』（新評論、2002年）藪下監修『立憲主義の政治経済学』（東洋経済新報社、2008年）ほか。

参考文献
Reference Book(s)

開講時に参考文献一覧を配布する予定である。

評価方法 Evaluation	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	50 %	
平常点評価 Class Participation	50 %	
その他 Other	%	

備 考
Note

憲法を未履習のゼミ生は、三年次に必ず履修すること。

関連URL
URLs for References

政治学科

2012

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
106	政治学演習 (河野勝)	通年	3年以上：4単位	河野 勝 政政・経演・国演

副 題
Subtitle

現代日本政治の諸問題

授業概要
Course Description

日本の政治を政治学的に考察する。往々にして、現代の日本政治を語る語り口は、評論的でジャーナリスティックになりがちになるが、本演習では理論やモデルをふまえて、政治学的分析の題材として日本政治の諸相をとらえることを心がける。

実際にどのような問題を扱うかは、参加する学生諸君の関心にゆだねる。選挙、政党政治から公共政策、防衛・外交に至るまで、広くかたよりのないトピックを数多く扱えることが理想であるが、教官がプレゼンテーションの内容を押しつけることはしない。しかし、その代わりに、自分の関心のある領域について知識を深めようとするのであるから、教官以上に専門的な情報を提供できるよう、熱心な取り組みが期待される。

なお、政治学的に考えるということは政治的に考えるということと全く異なる知的営為である。ひとりよがりのイデオロギーや特定の規範的価値を前面に押し出すのではなく、価値判断をするための経験的知識や考察を積み重ねることが目的であるとの前提で、演習へ参加してもらう。

授業の到達目標
Objectives

自分の力で、データを集め、事例を分析し、オリジナルで説得力のある議論を展開する能力を身につけること。

授業計画
Course Schedule

第1回：イントロダクション
第2回 - 第8回：教科書輪読
第9回 - 第15回：3年生：卒論ブレインストーミング
4年生：卒論 中間発表
第16回：イントロダクション
第17回 - 第23回：3年生：卒論中間発表
4年生：企業・産業・日本経済レポート
第24回 - 第30回：4年生：卒論最終発表

教科書
Textbook(s)

『アクセス 日本政治論』（平野 浩・河野 勝編 日本経済評論社）2011年

参考文献
Reference Book(s)

『制度』（河野 勝、東京大学出版会）2002年
『アクセス』シリーズ各巻（日本経済評論社）

評価方法
Evaluation

	割合(%) Percent(%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	50 %	
平常点評価 Class Participation	50 %	
その他 Other	%	

備考
Note

学生に対する要望：人生に対して真剣であること。自分を大切に、他人を尊重すること。心身ともに健康であること。

関連URL
URLs for References

<http://kohno-seminar.net/>

政治学科

2012

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
107	政治学演習 (小原隆治)	通年	3年以上：4単位	小原 隆治 政政・経演・国演

副題
Subtitle
自治・分権を考える

授業概要
Course Description
自治・分権をめぐるさまざまな問題を多面的な角度から考察する。春学期は、参加者がいくつかのテキストを輪読形式で読み進める。今年度は、まず最初に担当教員が最近著した論文を3点検討する。ついで複数の著者の手になる教科書的なテキストを1冊扱い、各自の問題意識を深めてもらう。夏合宿・秋学期は、参加者が春学期の学習を踏まえてそれぞれ関心あるテーマを選択し、テーマ別に編成したグループ単位で研究報告を積み重ねる。秋学期末に、それまでの研究成果を8,000字以上のレポートにまとめて提出する。
ゼミの学習面でも運営面でも、参加者の自主性に大いに期待したい。ゼミもまた「自治」の実践の場だからである。なお、ゼミに出席することは参加者の権利だが、そこには相応の責任がともなう。無断欠席は認められない。また、相当の理由なく各期回数分の3分の1以上欠席した者は、ゼミに参加する権利を自動的に失う。春学期で失格した者は秋学期に参加する権利を持たない。

授業の到達目標
Objectives
自治・分権をめぐる全体的な問題状況を把握する。そのうえで個別具体的な制度・政策・事例のレベルに落として課題を考察する方法態度を身につける。

授業計画
Course Schedule
第1回：ガイダンス
第2回 - 第4回：小原（2010 a / b, 2011 予定）を3回で輪読する。
第5回 - 第14回：磯崎・金井・伊藤（2011）を10回で輪読する。
第15回：今後の打ち合わせ（テーマ別グループ編成など）
夏合宿、第16回 - 第30回：参加者がテーマ別に編成したグループ単位で研究報告を行なう。

教科書
Textbook(s)
・小原隆治「分権・自治をどう進めるか」（山口二郎編『民主党政権は何をなすべきか』岩波書店、2010年 a）
・小原隆治「地域と公共性」（齋藤純一編『公共性の政治理論』ナカニシヤ出版、2010年 b）
・小原隆治「自治・分権とデモクラシー」（齋藤純一・田村哲樹編『アクセス デモクラシー論』日本経済評論社、2011年 予定）
・磯崎初仁・金井利之・伊藤正次『ホーンブック 地方自治（改訂版）』（北樹出版、2011年）
小原（2010 a / b, 2011 予定）は受講者にコピーを配付する。

参考文献
Reference Book(s)
開講時をはじめ随時紹介する。

評価方法 Evaluation	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	20 %	通常の試験・レポートと同じ観点から評価する。レポートはS、A、B等の評価結果を明記し、コメントをつけて返却する。
平常点評価 Class Participation	80 %	前述の出席要件を満たしていることを前提として、日頃のゼミへの貢献度を評価する。
その他 Other	%	

備 考
Note

関連URL
URLs for References

随時紹介する。

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
108	政治学演習 (佐藤正志)	通年	3年以上：4単位	佐藤 正志 政政・経演・国演

副題
Subtitle

公共性の思想史 - 近代啓蒙の批判的継承

授業概要
Course Description

本演習では西洋政治思想史上の古典的著作を、古典として現代になお生きつづけていることの意味を考えながら、またそれぞれのテキストの書かれた文脈をふまえながら、じっくりと読むことをひとつの目標としている。本年度も引き続き、いま、あらためて「啓蒙とは何か」を考えるという視点から、ルソーや百科全書派、またカントの古典に立ち戻る。同時に、啓蒙思想の歴史的コンテクストとして、書物や新聞の読者としての公衆の登場や世論の成立に着目しながら、市民社会と公共圏の形成について考察する。ハーバーマスやフーコーらの著作を読んで、私たちが現代の政治と公共性について考えるときに啓蒙思想はどのような意味をもっているのかを検討する。このようにして啓蒙の政治的ヴィジョンの多様性と現代性の再検討を目指す。

ゼミは毎回、共通テキストの分担報告を中心とする。本年度の主題に即して、古典を輪読すると同時に、それらのコンテクストに関する報告を分担して行う。夏期合宿では主題に関わる現代思想を取り上げる。こうした共通の取り組みと同時に、ゼミ参加者は、広く政治思想にかかわる領域から、それぞれ自分の問題関心にしたがってテーマを選び、研究をすすめることになる。春期と秋期にそれぞれ、その報告と討論の機会をもうける。なお専門演習では、こうした演習での成果を基礎に、ゼミ論文の作成にむけた指導と、中間報告が中心となる。各自の問題関心にしたがって研究を深めると同時に、できる限り、他のメンバーの取り組んでいる問題への関心を共有し、知識の幅を広げてゆけるようなゼミの持ち方を追求したいと思う。

授業の到達目標
Objectives

ゼミの課題に関連して自ら課題を設定し、レポートを作成すること。

授業計画
Course Schedule

第1回：ガイダンス
第2回：共通課題についての問題提起とディスカッション
第3回 - 第11回：共通課題についての分担報告とディスカッション
第12回 - 第14回：個別課題予備レポート報告
第15回：中間の理解度の確認
第16回 - 17回：共通課題についての分担報告とディスカッション
第18回 - 第23回：個別課題レポート中間報告
第24回 - 第29回：共通課題についての分担報告とディスカッション
第30回：総括、レポート提出

教科書
Textbook(s)

本演習では、初めに共通課題に関してディスカッションを行い、それを踏まえて主として古典的作品を共通テキストとして決定する。以下は本課題に関する古典の例。
ルソー『学問・芸術論』『人間不平等起源論』『社会契約論』、カント『啓蒙とは何か』など。

参考文献
Reference Book(s)

ロイ・ポーター『啓蒙主義』（岩波書店、2004年）。
トドロフ『啓蒙の精神』（法政大学出版局、2008年）。
ホーフ『啓蒙のヨーロッパ』（平凡社、1998年）。
ピーター・ゲイ『自由の科学 - ヨーロッパ啓蒙思想の社会』（ミネルヴァ書房、1982年）。
ヴェントゥーリ『啓蒙のユートピアと改革』（みすず書房、1981年）。
ダントン『禁じられたベストセラー - 革命前のフランス人は何を読んでいたか』（新曜社、2005年）。
ホルクハイマー、アドルノ『啓蒙の弁証法』（岩波書店、1990年）。
ハーバーマス『公共性の構造転換』第2版（未来社、1994年）。
フーコー『啓蒙とは何か』（『フーコー・コレクション<6> 生政治・統治』（ちくま学芸文庫、2006年）。
佐藤正志編『啓蒙と政治』（早稲田大学出版部、2009年）。

その他、ゼミのなかで紹介する。

評価方法
Evaluation

	割合(%) Percent(%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	50 %	課題設定、文献の活用、論理的構成。
平常点評価 Class Participation	50 %	分担課題についての発表と議論への積極的参加。
その他 Other	%	

備考
Note

関連URL
URLs for References

<http://www.f.waseda.jp/ssato/>

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
109	政治学演習 (高橋恭子)	通年	3年以上：4単位	高橋 恭子 政政・経演・国演

副題
Subtitle

映像ジャーナリズム研究 東日本大震災とメディア

授業概要
Course Description

東日本大震災から早7ヶ月。地方紙から中央紙、NHK・在京民放キー局からローカル局、コミュニティFMやネットメディアに至る多種多様のメディアが膨大な震災情報を提供している。マスメディアに対しては、東京発信の「被災地の視点」を欠いた報道、被災地の人々の不安や不信感を煽った報道等の批判がある一方で、阪神大震災の集中豪雨型報道の反省から、全国紙やテレビ局が地方の中小都市に記者を駐在させるなど被災地から情報を発信する大手メディアも見られる。本演習では、メディアが未曾有の大震災をどのように伝えたか、何が伝えられ、何が伝えられなかったのか、中央と被災地のメディアの伝え方の違いは何かを分析・調査し、震災報道のあり方を考察する。具体的には、1. 講義と討論「映像メディア検証」、2. 学生による震災報道分析、3. 被災地のローカルメディア取材・調査、4. 震災報道のあり方の検証、5. 取材・調査から成果物（文章、映像、写真、Web等）の制作、発表・評価から構成する。映像メディア分析では、メディア・リテラシー研究の分析手法を採用し、(1)メディア・テキスト、(2)オーディエンス、(3)テキストの生産・制作の3つの領域から考察する。取材・調査計画は夏休みのゼミ合宿で発表し、取材・調査は夏休み中に実施する予定である。

授業の到達目標
Objectives

メディアをクリティカルに分析する力とメディアを創造する実践的な力を養う。
実践はドキュメンタリー、フォトストーリー、Webコンテンツ、ソーシャルメディアを利用したコンテンツなど個々の知識と能力によって選択する。

授業計画
Course Schedule

第1回：映像メディア検証とメディア・リテラシー
第2回：4年生による「被災地のローカルメディア」の成果物発表
第3回：映像メディア検証
第4回：課題図書プレゼンテーション
第5－8回：メディア分析プレゼンテーション
第9回：映像メディア検証
第10回：課題図書プレゼンテーション
第11回：何を取材、調査するか。テーマの設定と企画
第12回：企画のブレインストーミング
第13－15回：被災地のメディア テーマ設定と企画、調査、取材
第16回：取材計画のプレゼンテーション
第17－20回：取材・調査中間発表
第21回：課題図書プレゼンテーション
第22回：取材した材料をどのようにまとめるのか/ 骨子と素案
第23回：取材から構成
第24－26回：震災報道のあり方の検証
第27－29回：成果物の発表
第30回：理解度の確認

教科書
Textbook(s)

実際に放送されたテレビ番組、ドキュメンタリー映画、インターネット上の映像をテキストとして使用する。資料は毎回、コピーして配布する。

参考文献
Reference Book(s)

メディア・リテラシー教育 学びと現代文化、デビッド・バックingham 世界思想社
「メディア・リテラシーの現在と未来」鈴木みどり編著 世界思想社
「ドキュメンタリー映画の地平」佐藤 真
「マスコミュニケーション研究」デニス・マクウェル 慶応義塾大学出版会
「災害情報とメディア」平塚千尋 リベルタ出版
「震災とメディア」山中茂樹 世界思想社
「シビック・ジャーナリズムの挑戦」寺島英弥 日本評論社

評価方法 Evaluation	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	25 %	メディア分析 メディアリテラシーの理解度。
平常点評価 Class Participation	50 %	出席と授業の主体的参加度。
その他 Other	25 %	コンテンツのプランニングと実践力。

備考 Note	本演習にはコンテンツ制作のための技術指導が含まれません。映像制作のための技術を身につけたい場合は、オープン教育センター開講の「映像芸術表現」など映像系科目を受講するなどしてください。
------------	---

関連URL URLs for References	http://www.f.waseda.jp/kyt/
------------------------------	---

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
110	政治学演習 (田中愛治)	通年	3年以上：4単位	田中 愛治 政政・経演・国演

副題
Subtitle

現代政治学の実証分析・計量分析

授業概要
Course Description

現代政治現象の実証的な分析方法を実践的に学ぶ。日本および海外の投票行動・政治意識（世論）が担当教員の主な関心であるが、ゼミ生は政治過程全般に少しひろくテーマを設定しても良い。その中で、政治学的に意味のある仮説を立て、仮説の実証的な検証方法を学び、説得力をもった議論の展開の方法を身につけるように心がけたい。また、専門書や学術論文を読むことも、実証分析との関連で必要となるだろう。

3年生は秋の早稲田祭にグループごとに共同研究（グループワーク）の成果を発表するので、6月中旬から10月末までは、グループごとにその作業にとりかかる予定。

4年生は、各自が実証研究のテーマを設定して、卒論研究を行う。

夏休みは9月にゼミ合宿を行う予定。また年度の末に向けて、同志社大学と遠隔（テレビ会議方式）合同ゼミでプレゼンを互いに行う予定。

授業の到達目標
Objectives

ある政治又は経済現象の原因を探るため、仮説を立てて原因と考えられる要因が本当に原因と言えるのかを根拠を示して実証する能力を身につけることが目標である。そのために、SPSSを用いた実証的な統計分析により仮説を検証する能力を身につける。

授業計画
Course Schedule

- 第1回：実証政治分析の考え方
- 第2回：実証分析の方法論を学ぶ：高根正昭『創造の方法学』（1）
- 第3回：実証分析の方法論（2）高根正昭『創造の方法学』3章
- 第4回：実証分析の方法論（3）高根正昭『創造の方法学』4章
- 第5回：実証分析の方法論（4）高根正昭『創造の方法学』5章 前半
- 第6回：実証分析の方法論（5）高根正昭『創造の方法学』5章 後半
- 第7回：実証分析の方法論（6）高根正昭『創造の方法学』6章 - 終章
- 第8回：計量分析の実習（1）パソコンによる統計分析 SPSS（1）
- 第9回：計量分析の実習（2）パソコンによる統計分析 SPSS（2）
- 第10回：計量分析の実習（3）パソコンによる統計分析 SPSS（3）
- 第11回：計量分析の実習（4）パソコンによる統計分析 SPSS（4）
- 第12回：グループワークのテーマ設定（1）
- 第13回：グループワークのテーマ設定（2） - グループ分け（テーマ別に）
- 第14回：グループワークによるデータ収集
- 第15回：テーマ別にグループ毎の夏休みの作業方針の決定
- 第16回：グループワークのグループ毎のデータ分析（1）
- 第17回：グループワークのグループ毎のデータ分析（2）
- 第18回：早稲田祭発表の準備・プレゼンテーション練習（1）
- 第19回：早稲田祭発表の準備・プレゼンテーション練習（2）
- 第20回：政経学部論文コンクールに向けて研究開始
- 第21回：政経学部論文コンクールに向けて分析（1）
- 第22回：政経学部論文コンクールに向けて分析（2）
- 第23回：政経学部論文コンクールに向けて執筆開始
- 第24回：政経学部論文コンクールに向けて完成
- 第25回：同志社大学との合同ゼミに向けてグループごとの分析とプレゼン（1）
- 第26回：同志社大学との合同ゼミに向けてグループごとの分析とプレゼン（2）
- 第27回：同志社大学との合同ゼミに向けてグループごとの分析とプレゼン（3）
- 第28回：各自卒論のテーマ設定とプレゼン（1） - 卒業後の進路検討（1）
- 第29回：各自卒論のテーマ設定とプレゼン（2） - 卒業後の進路検討（2）
- 第30回：各自卒論のテーマ設定とプレゼン（3） - 卒業後の進路検討（3）

教科書
Textbook(s)

伊藤光利、田中愛治、真淵 勝『政治過程論』有斐閣（2000年4月）
久米郁男、川出良枝、古城佳子、田中愛治、真淵 勝『政治学』有斐閣（2003年12月）
高根正昭『創造の方法学』講談社新書

参考文献
Reference Book(s)

ゼミの中で紹介する。

評価方法
Evaluation

	割合(%) Percent(%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	20 %	
平常点評価 Class Participation	50 %	
その他 Other	30 %	出席。

備考
Note

学生に対する要望：
関連科目：「政治過程論」「計量政治学」は履修してもらいたい。ゼミへの出席は重視し、100%出席が原則と考えてもらいたい。

関連URL
URLs for References

授業初回または説明会（開催予定）の際に、お知らせします。

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
111	政治学演習 (田中孝彦)	通年	3年以上：4単位	田中 孝彦 政政・経演・国演

副題
Subtitle

世界政治秩序の歴史的変容と現在

授業概要
Course Description

このゼミでは、第二次世界大戦後の「冷戦」とよばれた時代から今日にかけて、世界政治がどのように変化してきたのかについて、分析を試みる。まず最初の学期では、アメリカの大学で評判の高い入門的な教科書を読み、国際政治の理論と歴史についての基礎知識と分析の方法を学ぶ。次に、冷戦時代の国際政治の歴史的展開について書かれた教科書と、重要な論点についての定評のある新しい研究論文と一緒に読み進めながら、冷戦時代の国際政治の変容過程について、理解を深める。最後に、冷戦の終焉から今日までの世界秩序のあり方についての論文を数本読むことを通じて、現在我々がどのような世界に生きており、今後どのような世界秩序が形成されるのかについて、考察を試みる。なお、夏と春に合宿を行い、現在の国際政治上の事象についての、定評のある論文を読みすすめる。また、各授業においては、できるかぎりアメリカやイギリス、そして日本の公開された機密文書の史料を読む。

授業の到達目標
Objectives

国際政治学について考察する際に必要不可欠で基本的な概念についての知識を、習得する。

理論的な分析方法と歴史的な分析方法の両方を用いて国際政治の現象を理解することできるようにする。

冷戦の時代から今日までの国際政治の変化を読み解くことで、現在の国際政治に対する主体的な判断ができるような人材となる。

授業計画
Course Schedule

- 第1回：オリエンテーション
- 第2回：国際政治学の基礎（1）：現実主義とリベラリズム
- 第3回：国際政治学の基礎（2）：戦争はなぜ起こるのか
- 第4回：国際政治学の基礎（3）：第一次世界大戦の起源
- 第5回：国際政治学の基礎（4）：第二次世界大戦の起源
- 第6回：国際政治学の基礎（5）：冷戦とは何だったのか
- 第7回：国際政治学の基礎（6）：冷戦後の紛争
- 第8回：国際政治学の基礎（7）：グローバル化と相互依存の国際政治
- 第9回：国際政治学の基礎（8）：脱国家主体の台頭
- 第10回：国際政治学の基礎（9）：冷戦後国際秩序
- 第11回：冷戦期国際政治史（1）：なぜ冷戦を学ぶのか
- 第12回：冷戦期国際政治史（2）：冷戦史研究の視点
- 第13回：冷戦期国際政治史（3）：冷戦開始の前提条件 1
- 第14回：冷戦期国際政治史（4）：冷戦開始の前提条件 2
- 第15回：冷戦期国際政治史（5）：冷戦の起源（欧州）1
- 第16回：冷戦期国際政治史（6）：冷戦の起源（欧州）2
- 第17回：冷戦期国際政治史（7）：冷戦期におけるアジア国際政治 1
- 第18回：冷戦期国際政治史（8）：冷戦期におけるアジア国際政治 2
- 第19回：冷戦期国際政治史（9）：冷戦の変容と拡大 1
- 第20回：冷戦期国際政治史（10）：冷戦の変容と拡大 2
- 第21回：冷戦期国際政治史（11）：人類滅亡の危機から緊張緩和へ 1
- 第22回：冷戦期国際政治史（12）：人類滅亡の危機から緊張緩和へ 2
- 第23回：冷戦期国際政治史（13）：冷戦と社会変動 1
- 第24回：冷戦期国際政治史（14）：冷戦と社会変動 2
- 第25回：冷戦期国際政治史（15）：冷戦と社会変動 3
- 第26回：冷戦期国際政治史（16）：緊張緩和の進展と挫折 1
- 第27回：冷戦期国際政治史（17）：緊張緩和の進展と挫折 2
- 第28回：冷戦期国際政治史（18）：冷戦の終焉 1
- 第29回：冷戦期国際政治史（19）：冷戦の終焉 2
- 第30回：冷戦期国際政治史（20）：冷戦の終焉 3

教科書
Textbook(s)

- 1 . Joseph S. Nye, Jr. and David A. Welch, Understanding Global Conflict and Cooperation: An Introduction to Theory and History, Pearson, 2010.
- 2 . Robert J. McMahon, The Cold War: A Very Short Introduction, OUP, 2003.
- 3 . Jussi Hanhimaki & Odd Arne Westad, The Cold War: A History in Documents and Eyewitness Accounts, OUP, 2003.
- 4 . G. John Ikenberry, After Victory: Institutions, Strategic Restraint, and the Rebuilding of Order after Major Wars, Princeton UP, 2001.
- 5 . Stanley Hoffmann, Chaos and Violence: What Globalization, Failed States, and Terrorism Mean for U.S. Foreign Policy, Brown & Littlefield, 2006.

参考文献
Reference Book(s)

授業中に適宜紹介する。

評価方法
Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	試験は行わない。
レポート Report(s)	20 %	年に数回提出を要求する。全提出が前提。
平常点評価 Class Participation	80 %	担当の報告の内容と、授業中の討議でのパフォーマンスの質と量から判断する。
その他 Other	%	

備考
Note

- 1 . 上記の授業計画に加えて、夏合宿を行い、時事的な問題についての論文などを読み議論します。スポーツもやります。就活などによって困難ではありますが、春または冬合宿も計画しています。授業の補完をし、スキーもやります。
- 2 . 前向きで熱意のある人、チャレンジ精神旺盛な人、来たれ。
- 3 . なお、英語の文献をたくさん読みますが、はじめの半年をクリアすれば、すぐに慣れます。1時間に10ページは読めるようになります。ひるまずにチャレンジしてください。

関連URL
URLs for References

授業初回または説明会（開催予定）の際に、お知らせします。

政治学科

2012

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
112	政治学演習 (谷藤悦史)	通年	3年以上：4単位	谷藤 悦史 政政・経演・国演

副題
Subtitle

世論・メディア政治・政治コミュニケーション研究

授業概要
Course Description

マス・メディアの発達と社会への浸透さらにまた新しいメディアの誕生は、政治のあり方を変えつつあります。本演習は、社会の情報化による政治的影響を様々な角度から探ることをねらいとして研究を進めます。

具体的には、情報テクノロジーの発達と政治過程の変容、政治態度、政治意見、政治的価値観、政治イメージ形成とマス・メディアの関係、選挙キャンペーン、投票行動とマス・メディアの諸影響、現代テレビ政治の特質、政治ジャーナリズムの現代的特性、現代世論の特性などの問題を、最新の理論成果を基に研究します。

研究は、理論と分析方法の検討、データの収集と解析、比較研究の視座からの欧米各国と我が国の状況との比較検討、などを行う形で進めます。マス・メディアと政治、世論などに関心を持ち、積極性のある学生を求めます。

授業の到達目標
Objectives

高い分析能力と論理的な思考能力の獲得。
ゼミナール論文の完成(40,000字程度)。

授業計画
Course Schedule

- 第1回：春学期演習のガイダンス
- 第2回：政治とメディアをどう研究するか
- 第3回：現代ニュースの特性
- 第4回：現代ニュースの生産過程
- 第5回：現代のジャーナリズムとジャーナリスト
- 第6回：現代のPRと政治
- 第7回：現代のオーディエンス
- 第8回：現代の選挙とメディアを理解する
- 第9回：現代政党のメディア利用を理解する
- 第10回：現代紛争とメディア
- 第11回：現代のテロとメディア
- 第12回：ニューメディアと政治的利用
- 第13回：ニューメディアは民主主義を変えるか
- 第14回：政治とメディア研究の方法
- 第15回：春学期理解度の確認
- 第16回：秋学期演習のガイダンス
- 第17回：世論概念を検討しよう(1)
- 第18回：世論概念を検討しよう(2)
- 第19回：世論の歴史(1)
- 第20回：世論の歴史(2)
- 第21回：世論の歴史(3)
- 第22回：世論をどうとらえるか
- 第23回：現代の世論調査
- 第24回：社会学的世論研究
- 第25回：心理学的世論研究
- 第26回：認知心理学と世論研究
- 第27回：世論の経済学的方法
- 第28回：世論と現代民主主義(1)
- 第29回：世論と現代民主主義(2)
- 第30回：秋学期理解度の確認

教科書
Textbook(s)

授業でそのつど指示します。

参考文献
Reference Book(s)

M. L. デフレー、S. ポール＝ロキーチ 柳井・谷藤訳 『マスコミュニケーションの理論』 敬文堂
谷藤・大石訳 『リーディングス政治コミュニケーション』 一芸社
谷藤 『現代メディアと政治』 一芸社
谷藤 『政治コミュニケーションを理解する52章』 早稲田大学出版部

評価方法
Evaluation

	割合(%) Percent(%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	50 %	年次における数回のレポート。
平常点評価 Class Participation	50 %	ゼミにおける発表・報告。
その他 Other	%	

備考
Note

関連科目：政治学、現代デモクラシー論、政治過程論、マス・コミュニケーション論、社会調査論などを取得するのが望ましい。
学生に対する要望：この分野に興味を持ち、主体的、積極的に研究する意欲ある学生諸君の参加を求めます。志望の際は研究のねらいと目標などを詳しく書くこと。連続してゼミに参加しない学生は評価しない。

関連URL
URLs for References

政治学科

2012

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
113	政治学演習 (土屋礼子)	通年	3年以上：4単位	土屋 礼子 政政・経演・国演

副 題
Subtitle

近代史におけるメディアとプロパガンダ、およびジャーナリズム

授業概要
Course Description

近代日本および欧米におけるメディアの発達の経緯を理解し、検閲制度をはじめとする政府との関係、政治家とジャーナリズムの関係、世論を動かすためのプロパガンダという思想がどのように展開してきたかを、実証的に学び議論する。また、実際にメディアやジャーナリズムに関係した人々にインタビュー調査や資料探索を行ない、メディアの歴史や、メディアに対するアプローチのしかた、メディアの分析のしかたに関する知見を深め、年度末には各自が卒論テーマを見いだせるよう研究をすすめる。

授業の
到達目標
Objectives

メディアとジャーナリズムに関する基本的知識を学ぶだけでなく、それを活用し、自分で資料を探索し読み解き、思考する能力を養う。また実際にインタビュー調査を行う力量を育成する。

授業計画
Course Schedule

- 第1回：全体的な導入
- 第2回：基本文献（日本語）の輪読（1）
- 第3回：基本文献の輪読（2）
- 第4回：基本文献の輪読（3）
- 第5回：基本文献の輪読（4）
- 第6回：基本文献の輪読（5）
- 第7回：基本文献の輪読（6）
- 第8回：中間のまとめと議論
- 第9回：基本文献（英語）の輪読（1）
- 第10回：基本文献の輪読（2）
- 第11回：基本文献の輪読（3）
- 第12回：基本文献の輪読（4）
- 第13回：基本文献の輪読（5）
- 第14回：基本文献の輪読（6）
- 第15回：前半のまとめと議論
- 第16回：各メディア及び人物の研究に関する導入
- 第17回：各メディア研究報告（1）
- 第18回：各メディア研究報告（2）
- 第19回：各メディア研究報告（3）
- 第20回：各メディア研究報告（4）
- 第21回：各メディア研究報告（5）
- 第22回：各メディア研究報告（6）
- 第23回：中間のまとめと議論
- 第24回：人物研究報告（1）
- 第25回：人物研究報告（2）
- 第26回：人物研究報告（3）
- 第27回：人物研究報告（4）
- 第28回：人物研究報告（5）
- 第29回：人物研究報告（6）
- 第30回：後半のまとめと議論

教科書
Textbook(s)

最初に、ユルゲン・ハーバーマス『公共性の構造転換』（未来社、第二版）を読む。以降は授業中に指示する。

参考文献
Reference Book(s)

参考書：土屋礼子共訳『米国のメディアと戦時検閲』（法政大学出版局）

『近代日本メディア人物誌』（ミネルヴァ書房）など。
他は随時紹介する。

評価方法 Evaluation	割合(%) Percent(%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	50 %	
平常点評価 Class Participation	50 %	
その他 Other	%	

備考
Note

メディア史に関心のある方で、積極的に議論する方を望みます。

関連URL
URLs for References

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
114	政治学演習 (坪井善明)	通年	3年以上：4単位	坪井 善明 政政・経演・国演

副題
Subtitle

東南アジアの政治と社会

授業概要
Course Description

ASEAN10カ国だけでなく、インド、中国、台湾、韓国を含む東南アジア、東アジアに関心を持つ諸君の参加を求めます。三年生の前半は、これらの地域の現状を分析するための社会的な基礎文献の購読を中心にゼミは展開されます。

アンダーソン、サイド、センなどの外国人研究者の文献だけでなく、中西徹、末廣昭、白石隆などの日本人研究者の文献も涉猟します。3年秋学期からは、グループに分かれて、担当の地域や国を決めて、各地域や各国の歴史・地理・政治・経済・文化などを包括的にかつ深く勉強して、自分の卒論のテーマを探します。4年生になってからは、自分の卒論のテーマを決め、それを書くための資料収集や現地調査をもらい、卒論完成に向けて中間発表や宿舎などを行います。4年生の最後には研修旅行として、ヴェトナムに行って、ハノイ大学・ホーチミン市大学との学生との討論会を予定しています。

授業の到達目標
Objectives

政治学を中心とした社会科学の古典・名著・刺激的な本等を「読み・書き・考える」ことを通して、更に東南アジア・東アジア一國を深く研究することを通じて、生涯にわたって「総合的な知識人」に自分を知的に鍛え上げていく方法を学びます。そして、大学を出て社会人になっても「真理の前の学び人」として一生自ら勉強に励む習慣を身につけることが出来る方法と基礎知識を習得することを目標とします。

授業計画
Course Schedule

- 第1回：授業方法の紹介、自己紹介
 第2回：課題書1。(各自2000字にレポートを書いてきて報告)
 第3回：課題書2。(各自2000字にレポートを書いてきて報告)
 第4回：課題書3。(各自2000字にレポートを書いてきて報告)
 第5回：課題書4。(各自2000字にレポートを書いてきて報告)
 第6回：課題書5。(各自2000字にレポートを書いてきて報告)
 第7回：課題書6。(各自2000字にレポートを書いてきて報告)
 第8回：課題書7。(各自2000字にレポートを書いてきて報告)
 第9回：課題書8。(各自2000字にレポートを書いてきて報告)
 第10回：課題書9。(各自2000字にレポートを書いてきて報告)
 第11回：課題書10。(各自2000字にレポートを書いてきて報告)
 第12回：課題書11。(各自2000字にレポートを書いてきて報告)
 第13回：課題書12。(各自2000字にレポートを書いてきて報告)
 第14回：課題書13。(各自2000字にレポートを書いてきて報告)
 第15回：課題書14。(各自2000字にレポートを書いてきて報告)
 第16回：課題書15。(各自2000字にレポートを書いてきて報告)
 第17回：課題書16。(各自2000字にレポートを書いてきて報告)
 第18回：課題書17。(各自2000字にレポートを書いてきて報告)
 第19回：課題書18。(各自2000字にレポートを書いてきて報告)
 第20回：課題書19。(各自2000字にレポートを書いてきて報告)
 第21回：課題書20。(各自2000字にレポートを書いてきて報告)
 第22回：東南アジア諸国の政治経済研究グループ報告1
 第23回：東南アジア諸国の政治経済研究グループ報告2
 第24回：東南アジア諸国の政治経済研究グループ報告3
 第25回：東南アジア諸国の政治経済研究グループ報告4
 第26回：東南アジア諸国の政治経済研究グループ報告5
 第27回：東南アジア諸国の政治経済研究グループ報告6
 第28回：東南アジア諸国の政治経済研究グループ報告7
 第29回：東南アジア諸国の政治経済研究グループ報告8
 第30回：総括と卒論の課題

教科書
Textbook(s)

授業中に指示する。

参考文献
Reference Book(s)

坪井善明『ヴェトナム「豊かさ」への夜明け』、『ヴェトナム新時代 - 「豊かさ」への模索』（岩波新書）を事前に読了しておくこと。

評価方法
Evaluation

	割合(%) Percent(%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	50 %	
平常点評価 Class Participation	20 %	
その他 Other	30 %	4年次の卒業論文、3年次は毎回のレポートと平常点の合計で評価。

備考
Note

課題書は参加学生と協議して決定する。ゼミへの出席は重視し、100%出席が原則と考えてもらいたい。

関連URL
URLs for References

政治学科

2012

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
115	政治学演習 (仲内英三)	通年	3年以上：4単位	仲内 英三 政政・経演・国演

副題
Subtitle 近代西欧政治社会の歴史

授業概要
Course Description 本年度は、19世紀後半から20世紀中葉にかけての英国とドイツの政治について、とくに政党の活動を中心に検討していきたい。同じくヨーロッパに属する英国とドイツではあるが、両地域における政党の発展は、歴史的・社会的・思想的なさまざまな要因から異なる発展を遂げてきた。それは当時の両地域の政治社会の違いを知るうえで重要であるばかりでなく、現在のヨーロッパの政治を考えるうえでも非常に示唆に富むものである。

授業の到達目標
Objectives 近現代のヨーロッパの政治について理解できるようになる。

授業計画
Course Schedule

第1回：政党とその役割
 第2回 - 第16回：英国の政党の発展
 第2回：政党研究の歴史と政党の類型
 第3回 - 第4回：1867年から1895年までの自由党優位の時代
 第5回 - 第6回：1874年から1900年までの保守党の復活
 第7回 - 第8回：19世紀後半（後期ヴィクトリア時代）の政治変革
 第9回 - 第10回：19世紀末から第一次大戦までの政党の危機
 第11回：世紀転換期の新自由主義の形成
 第12回：世紀転換期の労働主義と労働党の誕生
 第13回 - 第14回：1906年から1914年までの政党政治（選挙選を中心に）
 第15回 - 第16回：両大戦間期の政党と議会
 第17回 - 第30回：ドイツの政党の発展
 第17回 - 第20回：19世紀中葉からドイツ帝国創建までの政党
 (1) 自由主義諸政党 (2) 保守主義諸政党
 (3) 政治的カトリシズム (4) 社会主義諸政党
 第21回 - 第24回：ドイツ帝国時代の政党
 (1) 自由主義諸政党 (2) 保守主義諸政党
 (3) 中央党 (4) 社会民主党
 第25回 - 第30回：ヴァイマル共和国時代の政党
 (1) ドイツ民主党、ドイツ人民党 (2) 社会民主党
 (3) 中央党 (4) ドイツ国民人民党
 (5) ドイツ国民社会主義労働党 (6) ドイツ共産党

教科書
Textbook(s) なし。教師が授業内容に即したレジユメを配布する。

参考文献
Reference Book(s) 授業のはじめに、参考文献の一覧表を配布する。

評価方法 Evaluation	割合(%) Percent(%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	30 %	
平常点評価 Class Participation	70 %	
その他 Other	%	

備考
Note

関連URL
URLs for References

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
116	政治学演習 (中村英俊)	通年	3年以上：4単位	中村 英俊 政政・経演・国演

副題
Subtitle

国際政治の理論と現実 - 英国学派を中心に

授業概要
Course Description

EU・ヨーロッパ統合、アジアの地域統合、国際連合、G8 / G20サミット、核拡散問題、エネルギー問題、気候変動問題など国際関係・国際政治の事例について、その本質（「現実」）を研究（理解・説明・分析）する上で、私たちは一定の理論的枠組みを必要とする。国際政治の理論研究は、第二次世界戦争後、アメリカの学界を舞台に発展してきたと言える。そこでは、リアリズムとリベラリズムの間のパラダイム論争が重要な位置を占めてきた。しかし、大西洋の反対側・英国の国際政治学界では、アメリカの学問的流行とは一線を画した、独特な理論研究が積み重ねられてきた。「英国学派」（English School）と呼ばれる国際政治の見方を身に付けることが、本演習の基本的目標である。

本演習では、まず第1段階として、邦語・邦訳文献を中心にした輪読を通して、主としてアメリカ国際政治学界で展開してきたリアリズムとリベラリズムの論争について概観したい。この段階では、下記の参考文献（1）（2）などを読み込むことになる。つぎの第2段階では、「英国学派」の国際政治理論について、参考文献（3）（4）などで基礎知識を身に付けた後、より専門的な英語文献に取り組みたい。具体的には、英国国際政治学会（BISA）のReview of International Studies誌、および、英王立国際問題研究所（RIIA）のInternational Affairs誌などから各自が関心を寄せるテーマの論文を選び、報告・輪読の作業を重ねる。この段階で、各自が研究テーマを絞り込む作業を始めることになる。最後に第3段階では、それまでの理論研究の成果を踏まえて、各自が事例研究のテーマを決定する。そして最終的に、理論研究と事例研究が上手く融合するゼミナール論文を完成してもらう。

授業の到達目標
Objectives

本演習の3年（政治学演習）春学期には参考文献（2）の英語原著を輪読し、夏季休業中に各自の研究テーマを考え始め、秋学期には各自のテーマに即した先行研究（学術誌の英語論文）を輪読する。3年終了時点では、タームペーパーを提出してもらう。

4年（政治学演習）への過渡期（2 - 3月）に、同タームペーパーに基づく報告会を開催し、ゼミナール論文完成へ向けての課題を自覚してもらうことになるだろう。4年春学期には、ゼミナール論文の中間報告を重ね、特に夏季休業中には（3年生も前にして）全員参加の報告会を開催する。4年秋学期で完成させるゼミナール論文については、春季休業中に口頭試験ないしは最終報告会を開催することにする。

授業計画
Course Schedule

< 政治学演習（3年）>

第1回：オリエンテーション

第2回：国際政治の研究テーマ

第3回：英語基礎文献輪読（Nye and Welch, Chap. 1）

第4回：英語基礎文献輪読（Nye and Welch, Chap. 2）

第5回：英語基礎文献輪読（Nye and Welch, Chap. 3）

第6回：英語基礎文献輪読（Nye and Welch, Chap. 4）

第7回：先行研究の調査実習

第8回：英語基礎文献輪読（Nye and Welch, Chap. 5）

第9回：英語基礎文献輪読（Nye and Welch, Chap. 6）

第10回：英語基礎文献輪読（Nye and Welch, Chap. 7）

第11回：英語基礎文献輪読（Nye and Welch, Chap. 8）

第12回：英語基礎文献輪読（Nye and Welch, Chap. 9）

第13回：国際政治の理論と現実：各自の研究テーマの選定

第14回：各自の研究テーマに関する先行研究の検討

第15回：報告会：各自の暫定的研究テーマについて

第16回：研究テーマ報告：英語文献（先行研究）の紹介を中心に（1）（2）

第17回：研究テーマ報告：英語文献（先行研究）の紹介を中心に（3）（4）

第18回：研究テーマ報告：英語文献（先行研究）の紹介を中心に（5）（6）

第19回：研究テーマ報告：英語文献（先行研究）の紹介を中心に（7）（8）

第20回：研究テーマ報告：英語文献（先行研究）の紹介を中心に（9）（10）

第21回：研究テーマ報告：英語文献（先行研究）の紹介を中心に（11）（12）

第22回：研究テーマ報告：英語文献（先行研究）の紹介を中心に（13）（14）

第23回：研究テーマ報告：英語文献（先行研究）の紹介を中心に（15）（16）
 第24回：研究テーマ報告：英語文献（先行研究）の紹介を中心に（17）（18）
 第25回 - 第30回：タームペーパー中間報告
 <政治学演習（4年）>
 第1回 - 第20回：ゼミナール論文中間報告
 第21回 - 第30回：ゼミナール論文報告

教科書
Textbook(s)

参考文献
Reference Book(s)

- (1) 鴨 武彦ほか編『リーディングス・国際政治経済システム』（全4巻、有斐閣）特に、第1巻『主権国家を超えて』と第4巻『新しい世界システム』
 (2) ジョセフ・S・ナイ『国際紛争：理論と歴史』（田中明彦・村田晃嗣訳、有斐閣）
 * 英語原著最新版：Joseph S. Nye and David A. Welch, Understanding Global Conflict and Cooperation: An Introduction to Theory and History (8th Edition)
 (3) ヘドリー・ブル『国際社会論：アナキカル・ソサイエティ』（白杵英一訳、岩波書店）
 (4) Robert Jackson and Georg Sorensen, Introduction to International Relations

評価方法
Evaluation

	割合(%) Percent(%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	40 %	タームペーパー / ゼミナール論文の内容と口頭報告。
レポート Report(s)	30 %	レジュメに基づく報告（春学期・夏季・秋学期各1回以上）。
平常点評価 Class Participation	30 %	出席およびディスカッションへの積極的な参加姿勢（毎回、最低1回は発言してもらう）。
その他 Other	%	

備考
Note

関連科目：国際機構論、現代国際関係論、国際政治学、国際政治史、国際法など。オープン教育センターの「テーマスタディ（全学共通副専攻）」の中では、「EU・欧州統合研究」、「国際協力」など。
 学生に対する要望： 厳しく楽しいゼミを創りたいと思います。積極的かつ主体的に参加してくれる人の応募を待っています。
 留意事項：毎週木曜5時限のゼミは時間を延長して（6時限も）ジックリと議論を深めます。夏季休業中のゼミ合宿（予定）へも参加してください。なお、2012年度春学期は、特別研究期間のため、土曜日などに集中講義形式で「補講」を実施することがあります。

関連URL
URLs for References

http://taiken-waseda.jp/gakumon/zemi_nakamura_hidetoshi.html

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
117	政治学演習 (日野愛郎)	通年	3年以上：4単位	日野 愛郎 政政・経演・国演

副 題
Subtitle

メディアと選挙の実証分析

授業概要
Course Description

このゼミでは、メディアと選挙の実証分析について学びます。「選挙」という政治的な大イベントでは、政治家や政党はマニフェストという形で政策集を発表し、マス・メディアも、これらの政策メッセージや党首の発言などを報道します。そして、有権者は様々な政治的なメッセージを受け取ることになります。このゼミでは、3年次に内容分析 (content analysis) や世論調査分析 (survey analysis) の手法を学びながら、政治的情報を体系的に記録し、分析します。3年次の1年間で、実証分析の基礎であるデータ構築の方法・テクニックを身に付けてもらいます。4年次では、自らの関心に沿って卒業論文を作成してもらいます。テーマはメディアと選挙に関連することであれば何でも構いません。3年次に作成したデータを利用して論文を作成することも歓迎します。最終的に、自らの関心に沿って、仮説を検証することが目的となります。ゼミ全般を通して、他大学で実証分析を行っているゼミと連携して、合同ゼミを開催することも予定しています。

授業の
到達目標
Objectives

疑問に思うことを学術的な問いの形で表現する力 (リサーチクエスチョンを立てる力)、「これは！」と思う答えを探し出す力 (仮説を立てる力)、立てた仮説が正しいかを確認する力 (仮説を検証する力) を養います。

授業計画
Course Schedule

- 第1回：実証分析とは
- 第2回：リサーチクエスチョンを探す
- 第3回：仮説を立てる
- 第4回：作業化する
- 第5回：因果関係を特定する
- 第6回：ケースを選択する
- 第7回：資料を収集する
- 第8回：データを構築する
- 第9回：内容分析の方法(1)：分析の単位
- 第10回：内容分析の方法(2)：サンプリングとコーディング
- 第11回：世論調査分析の方法(1)：調査票の作成
- 第12回：世論調査分析の方法(2)：データベースの構築
- 第13回：実証研究の例(1)：比較マニフェスト研究
- 第14回：実証研究の例(2)：情勢報道研究
- 第15回：春学期の理解度の確認
- 第16回：ゼミ生による資料収集・報告(1)
- 第17回：ゼミ生による資料収集・報告(2)
- 第18回：ゼミ生による資料収集・報告(3)
- 第19回：データの構築(1)
- 第20回：データの構築(2)
- 第21回：データの構築(3)
- 第22回：データの構築(4)
- 第23回：データの構築(5)
- 第24回：ゼミ生による内容分析・報告(1)
- 第25回：ゼミ生による内容分析・報告(2)
- 第26回：ゼミ生による内容分析・報告(3)
- 第27回：ゼミ生による内容分析・報告(4)
- 第28回：ゼミ生による内容分析・報告(5)
- 第29回：仮説の検証とは
- 第30回：秋学期の理解度の確認

教科書
Textbook(s)

高根正昭『創造の方法学』講談社現代新書、1979年。
クラウド・クリッペンドルフ『メッセージ分析の技法 - 「内容分析」への招待』勁草書房、

1989年。
有馬明恵 『内容分析の方法』ナカニシヤ出版、2007年。

参考文献
Reference Book(s)

ゼミにおいて適宜指示します。

評価方法
Evaluation

	割合(%) Percent(%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	%	
平常点評価 Class Participation	70 %	ゼミにおける討論、報告、運営等の貢献度を総合的に評価します
その他 Other	30 %	3年次のグループワークの成果を評価対象とします

備考
Note

マスコミュニケーション理論、政治過程論、計量政治学、ジャーナリズム分析入門などの関連科目を履修していることが望まれます。

関連URL
URLs for References

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
119	政治学演習 (藤井浩司)	通年	3年以上：4単位	藤井 浩司 政政・経演・国演

副題
Subtitle

比較公共政策への接近

授業概要
Course Description

世紀の転換のただなかであって、20世紀後半期を通じて先進社会が共有してきた戦後コンセンサスの終焉が告げられている。21世紀になってさらに顕著になったこの揺らぎは、既成の体制として構築された社会・経済・政治構造の抜本的な組み替えを迫っている。Restructuring, realignmentなどといったフレーズで示される構造改革の課題は、特に政府／公共部門にとって「存立の危機」にかかわるほどにまで重くのしかかり、厳しく問い直されている。「モデルなき実験」、「羅針盤なき航海」ともいわれる課題への取り組みは、各国によってさまざまであり、再編の道程も定まっていない。自らの座標を定め、課題解決のためのオルタナティブを探るうえで、各国の政策対応を整理・分析する意義はこれまで以上に大きいといえる。こうした問題関心から、各国における個別政策分野での政策対応の現状・課題・展望について検討していきたい。

授業の到達目標
Objectives

各自の研究課題に関する論文作成。
議題に関する質疑応答。講評力の涵養。

授業計画
Course Schedule

第1回 - 第30回：受講生研究報告 + 質疑応答、講評・総括

教科書
Textbook(s)

別途随時指示する。

参考文献
Reference Book(s)評価方法
Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	30 %	レジュメ内容、ターム・ペーパー、卒論。
平常点評価 Class Participation	50 %	出席状況、参加意欲、授業運営への貢献。
その他 Other	20 %	ゼミ合宿などへのプロジェクトへの参加。

備考
Note

ゼミナールは、3・4年合同で2時限連続で行います。フルタイム参加するのがゼミ加入の前提条件です。また、合宿（夏）、コンパ（随時）など課外活動への参加は、ゼミ参加の基本的な条件です。

関連URL
URLs for References

政治学科

2012

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
120	政治学演習 (眞柄秀子)	通年	3年以上：4単位	眞柄 秀子 政政・経演・国演

副題
Subtitle

世界各国の比較政治分析

授業概要
Course Description

比較政治学の代表的な理論枠組みや分析手法を駆使して、現代政治世界のさまざまな「なぜ？」の解明に取り組む。検討テーマになりうるものは多岐にわたる。例えば、世界各国で、民主的アカウンタビリティがうまく機能しなくなるのは、どのような環境のもとにおいてなのか。欧州の債務危機は各国政治にどのような影響を及ぼしているのか。フランス、イタリア、ドイツなどの欧州各国の近年の選挙における保守回帰（フランス、イタリア、ドイツ等）はなぜ起こっているのか。各国福祉改革や経済構造改革における政府の役割重視と市場機能重視の度合いの国ごとの違いはなぜ起こるのか。豊かな非民主的体制はなぜ民主化が難しいのか。世界各国で、政治腐敗が起こりやすい国と起こりにくい国があるのはなぜか・・・これらに代表される多様な謎を比較政治学的アプローチで検討する。

アプローチのとり方は自由。社会学的、歴史的、経済学的アプローチのどれを使ってもよい。ややヨーロッパにアクセントが置かれるが、分析対象は、先進諸国、アジア、アフリカ、ラテンアメリカのいずれの地域・国でもよい。各自がそれぞれの分析対象国に関する緻密な研究を行うと同時に、他のゼミ生の研究発表を通じて世界中の政治の現在を知り、さまざまな問題の解決の道を模索する。

またゼミでは、できる限り海外ゲストに講演していただく機会を作りたい。2010年度にはニューヨーク大学のA. プシェヴォスキ教授、ミラノ大学のA. マルティネッリ教授、S. サッキ教授を招聘し、政策刷新やパラダイム転換の可能性についてご講義いただいた。また2011年度はフランスからR. ボワイエ教授をお招きし、世界金融危機と政治についてお話いただく予定である。2012年度も、内外のゲストを招聘し、ゼミ生に活発に参加してもらいたい。ゼミでは、英語だけでなく、それ以外の外国語にも力を入れて勉強することを奨励したい。

授業の到達目標
Objectives

世界各国の政治の実態を把握し、比較政治学の理論や分析枠組みを用いてそれを分析することを通じて政治世界の今日的な諸課題に対して、政治学がどのように貢献できるのかを問いたい。

授業計画
Course Schedule

第1回：イントロダクション（自己紹介とスケジュール調整等）

第2回－第12回：文献の講読と討論

下のリストを参考に必要に応じてより新しい文献も加えて、重要な理論枠組みを検討する。

(1) R. ホーリングスワース、長尾伸一、長岡延孝『制度の政治経済学』木鐸社、2000。

(2) B. アマーブル著 山田鋭夫、原田祐治訳『五つの資本主義：グローバリズム時代における社会経済システムの多様性』藤原書店、2005。

(3) P. ホール、D. ソスキス著 遠山弘徳訳『資本主義の多様性：比較優位の制度的基礎』ナカニシヤ出版、2007。

第13回－第15回：各自の研究予定課題発表と討論

なお、夏休み期間にはゼミ合宿を予定している。

第16回－第29回：各国エネルギー政策・経済政策などテーマを設定し、国ごとのチームを作り、数週間にわたってグループ発表を行う。その後は各自の研究報告と討論。下記の文献を必要に応じて講読する。

(1) 日本比較政治学会編『比較政治学の将来』早稲田大学出版部、2006。

(2) 宮本太郎編『比較福祉政治：制度転換のアクターと戦略』早稲田大学出版部、2006。

(3) ツェベリス『拒否権プレイヤー：政治制度はいかに作動するか』早稲田大学出版部、2009。

(4) 眞柄秀子、井戸正伸編『拒否権プレイヤーと政策転換』早稲田大学出版部、2007。

(5) 眞柄秀子編『デモクラシーとアカウンタビリティ：グローバル化する政治責任』（風行社、近刊）

第30回：まとめ、研究プロポーザル提出

教科書
Textbook(s)

特になし。

参考文献
Reference Book(s)

眞柄・井戸『改訂版 比較政治学』放送大学教育振興会（2004年）。
新川・井戸・宮本・眞柄『比較政治経済学』有斐閣（2004年）。

評価方法
Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	30 %	
平常点評価 Class Participation	70 %	
その他 Other	%	

備考
Note

比較政治学の主要理論を学び、仮説を立て、それを実証するというスタイルで勉強したい人向き。特定のテーマや地域・国に関心を持ち、その最新の展開をフォローするよう心がけてほしい。本格的に研究したい人が多くを学べるゼミにしたい。

関連URL
URLs for References

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
121	政治学演習 (谷澤正嗣)	通年	3年以上：4単位	谷澤 正嗣 政政・経演・国演

副題
Subtitle

現代リベラリズムとその批判

授業概要
Course Description

政治を語る際に用いられる重要な概念について分析しつつ、「権力とはどんな力か」「自由と平等を両立させる政治体制は可能か」「正義と不正義を判断する原理は何か」といった問題を扱うのが政治理論である。政治理論の研究は古典古代にさかのぼる歴史的次元と、きわめて抽象的な哲学的次元を有するが、現代の研究の多くは「リベラル・デモクラシー」と呼ばれる特定の具体的な体制をなかば自明の前提としている。リベラル・デモクラシーに含まれる価値や規範を肯定し正当化する志向を強くもつ政治理論を「現代リベラリズム」と呼ぼう。他方、それらの価値や規範に対する批判に重きをおく政治理論を「現代リベラリズム批判」と呼ぼう。本演習では、現代リベラリズムとそれを批判するさまざまな潮流のあいだの対話を追いながら、現代リベラリズムがどのように洗練されてきたかを明らかにする。

授業の到達目標
Objectives

- (1) 現代政治理論の主要な論点、とくに現代リベラリズムとその批判について理解する。
- (2) 哲学的な読解、思考、表現、討論の技法を学ぶ。
- (3) 次年度に政治学演習を受講し、演習論文を執筆するための能力を涵養する。

授業計画
Course Schedule

- 第1回：イントロダクション 現代政治理論とは何か
 第2回：リベラリズムとは何か(1)
 第3回：20世紀のリベラリズム(2)
 第4回 - 第15回：『正義論』講読
 第16回：考察と討議(2) 夏季レポート報告
 第17回 - 第29回：文献講読(使用する文献は授業開始後に決定する)
 第30回：考察と討議(3) ゼミ論文執筆に向けて

教科書
Textbook(s)

春学期は川本隆史ほか訳『正義論』（紀伊国屋書店、2010年）を使用する。秋学期の教科書は授業開始後に受講生と相談の上で決定する。

参考文献
Reference Book(s)

川崎 修、杉田 敦編『現代政治理論』（有斐閣、2006年）
 太田義器、谷澤正嗣編『悪と正義の政治理論』（ナカニシヤ出版、2007年）
 戸田山和久『論文の教室』（日本放送出版協会、2002年）
 ウィル・キムリッカ（千葉、岡崎訳者代表）『新版 現代政治理論』（日本経済評論社、2005年）

評価方法
Evaluation

	割合(%) Percent(%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	50%	少なくとも2度のレポート提出を必須課題とする。問題設定の適切さと、レポート全体を構成する能力を重視する。
平常点評価 Class Participation	50%	レジュメによる報告、討論への積極的で協力的な参加、討論から明らかになる文献の理解度などを総合的に評価する。
その他 Other	%	

備考
Note

選考課題（レポート）を課す。課題の詳細は掲示を参照のこと。教員オリエンテーションで参考資料を配布するので必ず入手して熟読すべし。ゼミの見学は随時歓迎する。質問や相談は電子メールでどうぞ。

關連URL
URLs for References

政治学科

2012

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
122	政治学演習 (山本武彦)	通年	3年以上：4単位	山本 武彦 政政・経演・国演

副題
Subtitle

安全保障と国際政治

授業概要
Course Description

本演習では、国家安全保障、国際安全保障、脱国境安全保障（「人間の安全保障」を含む）の三つの安全保障の次元をめぐって書かれた英語文献の分析と検討、討論を通して国際政治の核心を構成してきた安全保障問題の本質を理解することに努める。具体的には安全保障関連の英語論文を“International Security”誌などの文献から引き出してグループごとに検討し、さらに全体討論で徹底的に掘り下げた討論を行うことによって、問題の所在を的確に把握することに努める。この研究は、各自の問題意識にそって卒業論文作成の前段階の試みであり、随時受講生による中間報告の機会も設けたい。評価は、受講者の担当した英語文献に基づく問題関心を問うレポートの内容と出席成績、討論への寄与度を総合して最終判定を行う。なお、1年に1回（2011年度は時期未定）に合宿を行い、問題意識のさらなる高揚に努める。演習希望者は当該合宿への参加が義務づけられるので、注意のこと。また、本演習では1997年以降、韓国の延世大学政治外交学科と交流プログラム（Wase Yon Program）を年2回実施しており、国際交流を通じた国際政治の理解の促進に努めていることを附記しておく。また、立命館大学政策科学部国際関係論ゼミとも合宿形式の討論会を行っている。

授業の到達目標
Objectives

高度な水準の英語論文を読むことで、安全保障の理論と実際を的確に把握できる能力を身につける。

授業計画
Course Schedule

第1回 - 第7回：“International Security”誌の中から1論文を選び、輪読開始（第1班）
第8回 - 第14回：“International Security”誌の中から他の1論文を選び、輪読開始（第2班）
第15回 - 第21回：“International Security”誌の中から他の1論文を選び、輪読開始（第3班）
第22回 - 第28回：“International Security”誌の中から他の1論文を選び、輪読開始（第4班）
第29回 - 第30回：4回にわたる輪読を踏まえて安全保障の現代的課題を討論

教科書
Textbook(s)

ハーヴァード大学ケネディ・スクール、Belfer Center for Science and International Affairs編集、“International Security”誌所収の論文

参考文献
Reference Book(s)

山本武彦編『国際安全保障の新展開』早稲田大学出版部
同 編『国際関係論のニューフロンティア』成文堂
同 編『冷戦後のアジアの安全保障』日本学術振興協会
同 著『安全保障政策』日本経済評論社
同 著『国際関係の理論と実際』ヌース出版
メアリー・カルドー著、山本武彦・渡部正樹訳『新戦争論』岩波書店
メアリー・カルドー著、山本武彦他訳『グローバル市民社会論』法政大学出版局
メアリー・カルドー著、山本武彦他訳『「人間の安全保障」論』法政大学出版局

評価方法
Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	50 %	担当論文に対する理解と批判精神。
平常点評価 Class Participation	40 %	討論参加の積極度。
その他 Other	10 %	出席点。

備考
Note

英語文献の読解能力の高さと積極・果敢な討論への参加の意欲が求められる。

関連URL
URLs for References

政治学科

2012

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
123	政治学演習 (吉野孝)	通年	3年以上：4単位	吉野 孝 政政・経演・国演

副題
Subtitle 現代デモクラシーの政治過程

授業概要
Course Description 現代デモクラシーは、多くの観点から見直しを迫られている。日本では「55年体制」の崩壊以降、新しい政党政治の在り方が模索され、従来の政府・行政の在り方が再検討されている（行政改革・地方分権）。実際、民主党政権の誕生によりその動きは本格化したものの、これまでのところ政権交代の効果は期待を下まわっている。また、新しい政策課題の出現とともに、住民投票やNPOなど新しい参加様式へ関心も高まっている。本演習の課題は、現代デモクラシーの政治過程についての理論と実際の研究をつうじて、現代デモクラシーの問題状況を把握しその解決策を展望することにある。

授業の到達目標
Objectives 疑問を研究テーマに変換し、それを論理的・段階的に思考し、そのプロセスを長い文章で表現する能力を習得する。

授業計画
Course Schedule 第1回 - 第6回：4年生の報告を聞き討論に参加。その後サブ・ゼミ（共同調査研究報告のグループ分け、各グループで構成・内容の検討（1）（2）、共同調査研究計画の概要報告）
第7回 - 第9回：課題（作業シート）の報告と質疑応答（1回につき4・5人）
第10回 - 第14回：共同調査研究の中間報告1 - 5（1回につき1グループ）
第15回：個人研究テーマの発表（全員）
第16回 - 第30回：個人研究の報告（1回につき3人）

教科書
Textbook(s)

参考文献
Reference Book(s)

評価方法 Evaluation	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	%	
平常点評価 Class Participation	100 %	出席 / 参加 20%、発表 80%。
その他 Other	%	

備考
Note 要望事項：本演習を、自分でやりたいテーマを見つけ、それに真剣に取り組む学生諸君の知的トレーニングの場としたい。これまで勉強してこなかったので、そろそろ勉強したいという者、大学院進学準備をしたい者も歓迎される。政党、選挙・投票行動などに興味をもつ履修希望者には、3年配当の政党論、政治過程論を履修することを奨める。また、履修希望者のうち政治学原論を未履修の者は、それも同時に登録・履修することが望ましい。

関連URL
URLs for References

政治学科

2012

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
124	政治学演習 (笹田栄司)	通年	3年以上：4単位	笹田 栄司 政政・経演・国演

副題
Subtitle

現代の司法

授業概要
Course Description

行政や国会に比べ変わるのことがなかった司法制度は、20世紀末に始まる改革によって大きく変容した。また、消極的と批判されることの多かった違憲審査も司法制度改革や憲法改正論議を経て積極的な動きを見せている。本演習は、近年、注目されることの多い司法について、法学、政治学、そしてメディアなどによる分析を検討することによって、司法制度の現状と問題点を把握することを狙いとする。まず、司法に強い関心を持っていることが重要である。司法についての知見が段階的に獲得できるよう演習プログラムを構成していくので、現時点での司法についての知識は問わない。演習の前半は、授業計画に挙げている教科書から割当てられたテーマの研究報告を受講生が行い、その報告に基づいて、全員で討論する。後半は、司法についての関心に応じて各自が自由にテーマを決め、研究報告を行う。

授業の到達目標
Objectives

司法制度の重要な柱である違憲審査制・最高裁判所・裁判官制度、近年導入された裁判員制度・検察審査会、そして裁判への影響が批判されている司法行政などについて、制度の概要及びその問題点を理解するとともに、関連する資料を調査し、自分の考えをまとめ、発表し、討論する能力の向上を目指す。

授業計画
Course Schedule

第1回：開講に当たって
第2回：市川・酒巻・山本『現代の裁判』第5版を読む
第3回：市川・酒巻・山本『現代の裁判』第5版を読む
第4回：市川・酒巻・山本『現代の裁判』第5版を読む
第5回：市川・酒巻・山本『現代の裁判』第5版を読む
第6回：市川・酒巻・山本『現代の裁判』第5版を読む
第7回：山口・宮地『最高裁の暗闘』を読む
第8回：山口・宮地『最高裁の暗闘』を読む
第9回：山口・宮地『最高裁の暗闘』を読む
第10回：山口・宮地『最高裁の暗闘』を読む
第11回：新藤『司法官僚』を読む
第12回：新藤『司法官僚』を読む
第13回：新藤『司法官僚』を読む
第14回：新藤『司法官僚』を読む
第15回：前半の理解度の確認
第16回 - 第29回：受講生と相談の上決定したテーマについて、各自報告する。
第30回：まとめ 期末レポートの講評

教科書
Textbook(s)

市川正人・酒巻匡・山本和彦『現代の裁判』第5版（有斐閣、2008年）、山口進・宮地ゆう『最高裁の暗闘』（朝日新書、2011年）、新藤宗幸『司法官僚』（岩波新書、2009年）

参考文献
Reference Book(s)

笹田栄司『司法の変容と憲法』（有斐閣、2008年）、木佐茂男他『テキストブック現代司法』第5版（日本評論社、2009年）

評価方法 Evaluation	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	50 %	
平常点評価 Class Participation	50 %	
その他 Other	%	

備 考
Note

憲法を未履修のゼミ生は、三年次に必ず履修すること。

関連URL
URLs for References